

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

高志 緑

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院文学研究科 招へい研究員

【研究題目】

宋代羅漢図の侍者表現に関する研究—異国人、鬼神を中心に—

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、宋代以降多数制作された羅漢図の中に描かれる侍者、とりわけ異国人や鬼神の表現に着目し、その表現の変化と背景を考察し、宋代羅漢図の変遷の様相を明らかにすることを目的とする。元来羅漢の周辺に描かれる侍者は、合掌する天部や王侯、僧形、礼拝したり供物を捧げる異国人、鬼神などさまざまであるが、もと百幅からなる大規模な南宋仏画の作例「大徳寺伝来五百羅漢図」(1178～88年)(以下、本作品と称する)では、先学も指摘するように異国人や鬼神が羅漢のもとで使役される様子を多く描く点が注目され、その後の羅漢図にも同様の傾向を持つ作例が見られる。仏教絵画の研究は、典拠となる仏典との照合や絵画様式の変遷、関連する儀礼から考察されるのが主流であるが、羅漢図にはその画題の豊富さによって世俗画に近い側面も認められるため、本研究では、描かれる世界を南宋当時の思想信条や視覚文化との関わりから検証する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

当初は北宋以前と南宋以降に制作された羅漢図や文献に記された羅漢図情報も検討対象としていたが、作品の残存状況に偏りがあったため、南宋の羅漢図として特にモニュメンタルな本作品を指標とし、画題の選択という視点を軸に置いた。当作品では駱駝に乗る異国人は従来通り礼拝・供養のために羅漢を訪問するが、南方系と見られる異国人や鬼神は、羅漢の背後や周辺でその手足となり、あたかも寺院生活をともにするように身近な親しい存在として描かれる傾向がある。そこで南方系の異国人や鬼神を使役する図が好まれた背景をそれぞれ検討した。

〈異国人〉

12世紀半ばは、南宋と東南アジア・中国西南諸勢力との外交儀礼が再整備され、中国西北地域の関係性とは異なる新たな国際秩序をもった時期である。大理国の「梵像図巻」(1172～75)や、後世の作品が残る「蕃王礼仏図」のような異国人を描く作品も多く作られた。南宋では、楼鑰(ろうやく)をはじめとする士大夫層に「職貢図」の存在が知られていた。しかし少なくとも現存する「職貢図」からの直接的引用は本作品にそれほど感じられず、むしろ当時入港していた現実の南方系異国人に取材した表現もが多数描きこまれているのではないかと推測された。改めて装束や染織品の表現に注目すると、中国系の染織品では北宋期に流行した金欄や円文が、南方系の染織品では間道(かんどう)と呼ばれる縞柄などが、出土遺物や伝世の名物裂、パガンの寺院壁画の一部などと共通するようである。

〈鬼神〉

中国土着の「鬼(き)」信仰では、怨恨をもつ魂がこの世に残り、災いを起こすとされる。本作品では冥界の裁判官の十王が獄卒として使役するような鬼神が羅漢のもとで働いている。宋代は、祀り手のない魂(横死孤魂)を救済するための儀礼が道教、仏教双方に整備された時期であり、先行研究では水陸会という儀礼による救済との関わりにも言及されている。研究期間中には具体的な資料を見いだせなかったが、仏画制作に関わった士大夫層が鬼神の存在を逆説的に利用し、異国人(=外交)とともに鬼神(=自国内政)との

関係も良好であるという善政のイメージが重ねられている可能性は高いと思われる。

【結論・考察】（４００字程度）

報告者はこれまでの南宋仏画研究で、北宋文化の継承と南宋的改変の両立が一つの特性であることを指摘しているが、本作品の場合、一具の羅漢図の中にさまざまな異国人が集う構想は、かつて北宋の真宗が行った泰山封禪の儀礼に同席した異国人のイメージとも重なるのではないだろうか。12世紀半ばの南宋と周辺諸国との関係性の再編にあたり、北宋の故事が参照された可能性も考えられる。

なお本作品においては、他にも仏塔制作や訳経事業など、特定の画題に基づく画幅のグループが見いだせ、これらは真宗期に皇帝の権威で行われていた仏教事業でもある。真宗は遼と対等の立場で盟約を結び（澶淵の盟）、この時期に国家の「正統」性を証明する営みが盛んであったことは先学も指摘している。北方勢力から逃げ延びた南宋という国もまた「正統」性を求めていたはずであり、こうした仏教絵画にそれを顕彰する痕跡が認められるとすると興味深い。他にも多くの要素を含む本作品の制作事情に関わる問題は、今後も時間をかけて考えてゆきたい。